無碍道

—親鸞の仏道の積極性—

延塚知道

はじめに

浄土教は一般に、此土（現生）から彼土（浄土）へという方向が強調される。それは、「往生浄土」とか「願生浄土」という浄土の仏道を表す基本語が、本来、此土から彼土へという方向を持っているからである。しかしそれが強調されすぎると、浄土教は現実の問題を逃避しているという誤解を生むことになる。事実よく聞く誤解であるし、さらにひどいのは、この世（現世）からあの世（浄土）へ生まれていく仏教であるという誤解さえある。そうなる現実の問題を担って、人間が人間以上の仏になっていく仏道という意味を失ってしまうことになる。

もちろん此土から彼土へという方向は、いうまでもなく、「罪悪生死の凡夫」が「五濁の世・無仏の時」に得証することは不可能であるという、浄土教特有の明確な時機の自覚に依るのである。しかし親鸞の時機の自覚をよく学んでいると、願生浄土の仏道は此土で得証できないから彼土の得証を目標とするという消極的なものではなく、現実の中で仏になっていく道に立つという積極的な意義を持っている。

本来仏道は自覚道である。釈尊の教えによって自己自身に目覚め、苦悩の原因を教えられてその苦を自覚的に超え

て仏になっていく道である。ただこの自覚道が、自力による得証というのではなく、『大無量寿経』の本願の教えに自己自身を見抜かれた懺悔の体験として、実現するところに親鸞の仏教の特質がある。阿弥陀如来に帰命する他力の信心、即ち機法二種深信として仏道本来の自覚道に立つのである。

この機の自覚を善導は

自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫より已来、常に没し常に流転して、出離の縁あることなし

というように、わが身の中に無始以来の人類の罪を、本願の教えに明確に自覚せしめられることである。したがって、自己の丸ごとの目覚めは、そのまま人類の歴史を内に包む懺悔である。

しかし翻って考えると、自己自身の目覚めなど、人間に起こるはずはない。まして人類の歴史を貫くような罪の自覚など、人間の立場で分かるはずはない。われわれが最後まで譲ることのないその人間の立場そのものに、『大無量寿経』の本願の教えの光が当たって、五体投地しなければならぬ体験を持つのである。それを親鸞は、「いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」と表明されるが、それは彼土の得証を捨てて、「地獄は一定すみか」と、此土の責任を担う主体の誕生を告げるものである。だからそれは、人類の罪の歴史への責任から、三宝の無いこの此土で、如来在ますが如くにこの穢土を担う勇気を賜るのである。そして最後の一人まで教化して、共に仏に成っていかうとする志願を生きる者となるのである。だから本願をわが命として生きようとする願生の主体は、此土の罪の全体を担って現生でそれを超えていかうとする歩みとなる。「地獄一定」の穢土において人類の罪を越えて「人間以上」の仏になっていかうとする歩みにこそ、願生の仏道の最も積極的な意義がある。そこに親鸞の仏道の特質がある。この論考では、今回と次回にわたって、その点に焦点を当てて考えてみたいと思う。

一 眞実教

よく知られているように『歎異抄』の二章に、親鸞は本願の教えとの出遇いを告げている。言うまでもなく二十九歳の時の法然との出遇いである。しかしそれを語っている親鸞は、八十歳を過ぎた最晩年の頃と推定されているから、五十年以上も前のことである。

私は二十九歳の時の親鸞であつたなら、法然との出遇いをあのような言葉で表現することはできなかつたのではないかと推測する。なぜなら宗教体験の事實は、「悲喜の涙を抑えて」というように、直接的には懺悔の悲しみと溢れるような謝念の喜び、以外ではないからである。その感動の意味と由来を浄土の經典や七祖の聖教に教えられ、やがて本願に立脚していくのである。その歩みが親鸞の教学である。だから法然との出遇いを眞実教との出遇いとして語る二章の親鸞の言葉は、長年の学問の歩みの中で確かめ続けられた事柄だけに、少しの無駄もなく簡にして要である。そこではまず法然の言葉が、

ただ念仏して弥陀にたすけられまいらずべし

という教えとして語られている。これは『大無量寿経』の本願の教えを、法然が伝えているのであるが、親鸞に自己自身の目覚めをもたらした教えとして最も大切な言葉である。だから親鸞が『大経』を聞思していく場合の、決定的な視点を教えたものでもある。

ちなみに『教行信証』に親鸞は、師の『選択本願念仏集』から題号と共に一文だけ引用している。

また云わく、それ速やかに生死を離れんと欲わば、二種の勝法の中に、しばらく聖道門を闔きて、選びて浄土門に入れ。浄土門に入らんと欲わば、正雑二行の中に、しばらくもろもろの雑行を抛ちて、選びて正行に帰すべし。

正行を修せんと欲わば、正助二業の中に、なお助業を傍にして、選びて正定を専らすべし。正定の業とは、すな

わちこれ仏の名を称するなり。称名は必ず生まるることを得、仏の本願に依るがゆえに、と。

総結三選の文といわれるこの文章をよく読むと、「本願の名号によって生死を超えよ」と言っている。『歎異抄』の先の法然の教えと全く同じ事を言っていることになる。『教行信証』も『歎異抄』も法然といえ、親鸞にとつては「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」という真実教以外にないのである。真実教とは言うまでもなく、人間丸ごとの目覚めをもたらす如来如実言である。だからこの教えを信じる信心に賜った自己への目覚めを、

いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし
と云うのである。

この『歎異抄』の法然との出遇いを語る一節には、本願も浄土も往生も出てこない。法然の「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」という真実教と、「よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり」という信心と、「いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」という信心に賜った目覚めだけが告げられている。要するに親鸞は浄土教を、仏道本来の自覚道にもどして、回心の体験を語っているのである。その弥陀の本願の教えについて親鸞は、『歎異抄』の後序で次のように述懐している。

弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ

この述懐を弟子の唯円は、善導の、

自身はこれ現に罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねにしずみ、つねに流転して、出離の縁あることなき身としれ

という金言と少しも違わないと聞き止めている。要するに「機の深信」として実現する自己自身の目覚めは、人間の努力によって起こるのではない。

龍樹が、自力の難行道について、

発願して仏道を求むるは、三千大千世界を挙ぐるよりも重し。

(聖全一卷・二五四頁)

と言うように、それはどんなに力の強い巨人でも、自分の力で自分の全体を持ち上げるような努力である。自己の丸ごとの目覚めは、人間の自力では不可能である。親鸞の述懐によれば、その目覚めは「弥陀の五劫思惟の願に」依る。「親鸞一人」の丸ごとの目覚め、さらには「そくばくの業をもちける身」というような個人を超えて人類の全体を相対化するような目覚めは、釈尊の本願の教え以外にはあり得ないと、いうのである。このように親鸞は、「弥陀にたすけられまいらすべし」という浄土の教えによって、釈尊のように悟りを開いて自己に目覚めていく道ではなく、弥陀の本願によって自己を教えられていく道を告げているのである。だからそこには、釈迦教から弥陀教へという仏道史観の転換がある。

したがって親鸞は、自分の身を抜きにして本願を説明しない。本願の教えに依って明らかにされたわが身と同時に本願を語るのである。

『歎異抄』の中からいくつかを拾ってみよう。

罪悪深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。

(『歎異抄』一章)

弥陀の本願まことにおわしまさば、釈尊の説教、虚言なるべからず。仏説まことにおわしまさば、善導の御釈、虚言したまうべからず。(中略)詮ずるところ、愚身の信心におきてはかくのごとし。

(『歎異抄』二章)

煩惱具足のわれらは、いずれの行にても、生死をはなるることあるべからざるをあわれみたまいて、願をおこしたまう本意

(『歎異抄』三章)

仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおおせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときのわれらがためなりけり

(『歎異抄』九章)

この悲願ましまさずは、かかるあさましき罪人、いかでか生死を解脱すべきとおもいて、

〔歎異抄〕十四章

されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ。

〔歎異抄〕後序

このように親鸞はわが身の事実と離れて、本願を語ることはない。そのような親鸞の立脚地を『歎異抄』は、見事に伝えている。

煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもって、そらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします。

〔歎異抄〕後序

これが『歎異抄』を語る親鸞の立脚地であり、親鸞の言葉が発せられる源である。

そのような親鸞の立脚地を、『大無量寿経』に返せば、当然、本願の成就文である。

あらゆる衆生、その名号を聞きて、信心歓喜せんこと、乃至一念せん。心を至し回向したまえり。かの国に生まれんと願すれば、すなわち往生を得て不退転に住す。唯五逆と誹謗正法とを除く。

この本願の成就文の親鸞の了解とその積極的な意味については、次回に改めて尋ねるとして、今は親鸞が『大無量寿経』の因願の文を読むときも、この本願の成就文に立つて読まれたことを注意しておきたい。そのような親鸞の態度に習いながら、本願の文のいくつか尋ねてみたい。

『大無量寿経』の四十八の本願の、まず最初は「無三悪趣の願」と呼ばれる願である。

たとい我、仏を得んに、国に地獄・餓鬼・畜生あらば、正覚を取らじ。

浄土には、地獄・餓鬼・畜生が無いようにと誓われている。経文はそう読めるが、自己とは何かを教えられた親鸞の目で読めば、地獄・餓鬼・畜生を作っているのは、穢土の私自身であった、と読んだのではなからうか。人類の歴史は戦争の歴史と言っている。お互いに同じ仲間を、利害によって殺し合うということは、他の動物にはないことであ

る。そのような地獄・餓鬼・畜生の世界を作ってきた人類の歴史こそ、人間そのものの罪ではないか。それを如来の智慧に、見抜かれ言い当てられたのではなからうか。

第二番目の願は、「不更悪趣の願」と呼ばれる。

たとい我、仏を得んに、国の中の人天、寿終わりての後、また三悪道に更らば、正覚を取らじ。

この願は、命終の後も三悪道に帰らないようにと誓われている。われわれには命終の後など視野にない。生きている時をどれほど豊かに快適に暮らすしか考えていない。そうなれば世間の地位や権力や金を求めることになる。そこに三悪道の源がある。

蓮如は、その世間を生きたる時に力になると思われることについて、次のように言う。

まことに、死せんときは、かねてたのみおきつる妻子も、財宝も、わが身にはひとつもあいそうことあるべからず。

〔御文〕一帖目十一通

世間の人間関係や金などは、生きているときには有効であっても死の前に立つたときには、それらは何の意味もない。だから蓮如は、

これによりて、ただふかくねがうべきは後生なり、またたのむべきは弥陀如来なり、信心決定してまいるべきは安養の浄土なり。

(同上)

という。今生だけでなく後生をも貫く真実である弥陀をたのめというのである。要するにこの二番目の本願は、今生と後生とを貫く無量寿を知らないわれわれの無明に、三悪道に帰る源があると教えているのであろう。

第三番目の願は、「悉皆金色の願」と呼ばれる願である。

たとい我、仏を得んに、国の中の人天、ことごとく真金色ならずんば、正覚を取らじ。

真金色とは仏と同じ色である。それに対して穢土は、皮膚の色による差別がある。無量寿を知らずに、区別し差別し

て優劣を競うところに、三悪道の原因があると教えているのであろう。

第四番目の願は、「無有好醜の願」と呼ばれる願である。

たとい我、仏を得んに、国の中の人天、形色不同にして、好醜あらば、正覚を取らじ。

これは第三番目の願と同じく、無明であれば結局は自我を立て他を区別し差別しながら優劣を競うという在り方になる。それは、皮膚の色だけに止まらないで、姿形の好き嫌いにまで展開していくことを教えている。そこに三悪道の原因があると、如来の智慧に見抜かれているのである。

このようにわれわれの無明は、無量寿という生死を貫く真理に暗いことである。その真理を知らなければ、結局自我と自力をたのむ外はない。親鸞は法然の「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」という教えによって、無明存在であったことを深く懺悔し、徹底して自力無功を知らされたのである。

二 無碍の一道

その真実の教えに遇うことが出来た感動を、親鸞は、

「回心」というは自力の心をひるがえし、すつるをいうなり。

〔唯信鈔文意〕

と表明している。この自力について、

自力というは、わがみをたのみ、わがころをたのみ、わがちからを上げみ、わがさまざま善根をたのみひとなり。

〔一念多念文意〕

という。ここで繰り返し言われるように、「自力」とは「わがみ」「わがころ」「わがちから」「わがさまざま善根」を「たのみ」ことである。「たのみ」とは、我とわが身が行うことを、最終的にはいつも正当化し絶対化してそれを頼みにする、人間の本能的な自分への深い執着心のことである。

この親鸞の知見から教えられることは、自分を正当化し絶対化してどこまでもそれに執着すれば、必ず、自分にとって好いことと悪いことを立てることになる。善悪好醜は、自分を抜きにして客観としてあるものではなく、自分に対する執着心こそが作り出すものである。この執着心こそが、「自力の心」といわれているものの正体である。

だから親鸞は、先の

「回心」というは自力の心をひるがえし、すつるをいうなり。

〔唯信鈔文意〕

に続けて、

自力のころをすつというは、ようよう、さまざまの、大小聖人、善悪凡夫の、みずからがみをよしとおもうころをすて、みをたのまず、あしきころをかえりみず、ひとすじに、具縛の凡愚、屠沽の下類、無碍光仏の不可思議の本願、廣大智慧の名号を信樂すれば、煩惱を具足しながら、無上大涅槃にいたるなり。 (同上)

と、「自力のころをすつ」というのは、自力が駄目だとか努力が駄目だというのではなくて、「よしとおもうころ」と「あしきころ」から解放されることである。善し悪しから解放され、優越感と劣等感から解放されて、まっすぐに如来の智慧海である無上大涅槃から開かれた人生に立つことである。

本願の教えによつて、善し悪しに苦しんできた原因が、はつきりと自分自身に対する根拠の無い執着心であったと知らされてみれば、人類の歴史を貫いてある地獄・餓鬼・畜生を作ってきた原因も、この深い執着心であったという懺悔の体験を持つのである。自力無功という自覚だけが、「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界」と言うように、生きる主体と世界とを、ひとつに結ぶのである。そして、われとわが世界である世間は虚仮であり、それを教えてくれた本願の名号のみが真実である、という明確な目覚めに立つのである。それを親鸞は、

善惡のふたつ総じてもつて存知せざるなり。そのゆえは、如来の御ころによしとおぼしめすほどにしりとおし
たらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、如来のあしとおぼしめすほどにしりとおし

りたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもって、そらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします。

〔歎異抄〕

と、述懐する。それははつきりと、分別し執着する世間の命に死んで、無上涅槃から開かれた命、浄土からの本願の命に蘇ることである。具体的には人間の善し悪しの全体を虚仮と知らしめた真実に生きようという願いを生きる者になることである。要するに善し悪しという相対的な人間の価値ではなく、本願の教えによって、真実か虚仮かということに目を開かれるのである。

そこに、

本願を信ぜんには、他の善も要にあらず。念仏にまさるべき善なきゆえに。悪をもおそるべからず。弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆえにと云々。

と言ひ、やうに、

善悪のふたつ総じてもって存知せざるなり。

と云うのである。そして善悪の執着が破られた者に、無上涅槃の方から開かれた人生を、

念仏者は、無碍の一道なり。

と云うのである。

このように『歎異抄』では、仏道が善悪を超える無碍道として説かれている。すでに寺川俊昭氏によって指摘されているように、『歎異抄』は『観無量寿経』の系譜に連なる聖典である。『観経』は言うまでもなく、章提希という苦惱する凡夫の救済が説かれた教えである。だから当然、苦悩の源が、自己自身への深い執着心であることに目覚めさせて、善悪のとらわれから解放しようとするのである。その『観経』に依る聖典だから、『歎異抄』では、その救いである「撰取不捨」が、善悪から解放された「無碍道」として説かれるのも当然である。

ただ問題は、自我を立て深い執着から離れられずに、善と悪を立てて生きる外はないわれわれからみれば、善悪を超えた世界である浄土は、どこまでも彼土であり未来という外はない。だから『観経』で説かれる「念仏往生」が、どうしても未来往生として捉えられる余地を残すのである。例えば『歎異抄』の九章で、親鸞が言うようにである。

なごりおしくおもえども、娑婆の縁つきで、ちからなくしておわるときに、かの土へはまいるべきなり。

この親鸞の言葉は、浄土は死後であり未来であると言っている。『観経』に依って浄土を語れば、このように言うことも不思議ではない。しかし何度もこの九章の文章を読んでいると、親鸞の意図が浄土は死後にあるという単純な未来往生を主張しているのではないように思われる。なぜならこの文章の前に、

久遠劫よりいままで流転せる苦惱の旧里はすてがたく、いまだうまれざる安養の浄土はいしからずさうろうこ
と、まことに、よくよく煩惱の興盛にさうろうこぞ。

と、親鸞が唯円に自力の執着心の深さを教える説法の中で、浄土は死後であり未来であると言われるのである。そこには、どこまでも凡夫の自覚を促すためという親鸞の意図が窺える。

この親鸞の教えから推測すれば、『観経』は韋提希に徹底した自己の目覚めを促すための手だてとして、浄土はどうしても未来の彼土として説く必要があったのではなからうか。浄土は、人間的な一切のものから隔絶された彼土である。だからこそ人間の全体を総体として映し出す鏡のような働きをする世界として、凡夫には、浄土を説く必要があったのではなからうか。

もちろん『観無量寿経』は、釈尊がわれわれを真実の目覚めに導く方便の教えである。だから、その教えによって無碍道に立った自覚から言えば、曾我量深が純粹未来というように、未来といっても時間的な未来ではない。浄土はどこまでも彼土であり未来であっても、それは平面的な時間の死後という未来ではなく、現生のただ中で善悪のたらわれを破る働きとして現に働いている。その意味で、本願の信に感得されている浄土は、われわれに往生道を成り

立たしめる根拠である。善悪を超え自我をも超えて「人間が人間以上の」仏に成っていかうとするあゆみの一步一步を保証する根拠を、浄土として捉えたときには、その仏道を願生浄土あるいは念仏往生と言う。また、その根拠を涅槃界と捉えたときには、無碍道と言うのである。曾我量深の自覚的な了解に依れば、そのように言うべきかと思われ。しかしそのような積極的な浄土観は、『観経』では充分に言い尽くされているとは思えない。何といても『大無量寿経』の本願成就文に立った親鸞の浄土の了解に依るまでは、本来の意味でその積極性は明晰にはならなかったのである。さらに機会を改めて、親鸞の『大経』に立った仏道の了解を尋ねて、願生浄土の仏道の積極的な意味を考えたい。